

門司港駅

門司：日本と世界への玄関口

門司港駅は1891年以来、九州を本州と、そして世界と繋いできた。左右対称なネオ・ルネサンス様式のデザインは門を思わせるもので、1世紀以上にわたって門司港が果たしてきた役割を反映している。駅が建設されて以来、移転、改名、改築されてきたが、20世紀初頭の門司の繁栄のシンボルであり続けている。

門司港の急速な発展に促される形で、1914年、門司市は古い駅舎を取り壊して新たな駅舎をより海に近い場所に建て、現在に至っている。当初は「門司駅」と呼ばれていたが、1942年4月「門司港駅」と改称された。この名称変更は九州の鉄道を本州を結ぶ関門トンネルの開通と時を同じくして行われた。

ヨーロッパ建築の影響

木造2階建てのこの建物は、石で覆われているように見えるが、実際は石の外壁に見えるよう形作られたモルタルの層で覆われている。マンサードの屋根、装飾的な鉄製の部分、それに正面玄関脇の付柱はいずれも19世紀半ばの欧州で主流となったネオ・ルネサンス建築の特徴である。これらの欧州風な要素の存在は、西洋のデザインが19世紀後半から20世紀初頭の日本の建築家に与えた影響を示唆している。

かつて賑わった駅

門司港駅は6年間の大規模改修を施されて2019年に再開業した。今日の門司港駅舎は公共の鉄道駅であり、1900年代初頭の門司のアイデンティティを具体的に物語る場所でもある。以前は1等と2等の旅券を持つ乗客の待合所であった券売所には豪華なマントルピースや暖炉など、20世紀の駅舎の様相が多数保持されている。メインホールの向こう側の、3等旅客が待合スペースとしていた場所はカフェに改装されている。正面玄関付近の階段から行ける二階には、かつては身分の高い旅客向けの特別なラウンジとその使用人用の別室があった。こうした特別な旅客は、列車の食堂車両と同じ会社が運営するみかど食堂のヨーロッパ料理でもてなされた。そうした豪華な調度や優雅な内装は、現在ではこの歴史的な駅舎の展示物の一部となっている。

思い出される門司港の過去

門司港駅は、九州の陸路を門司港と、ひいては広い世界と結ぶ重要な役割を担っていた。長年にわたり、何百万人もの人々がこの港から出発し、この港に戻ってきており、そうしたストーリーのいくつかは今も語り継がれている。

池田うた子と「誇りの鏡」

北西の棟には、池田うた子のお話を伝えるプラカードと並んで、装飾が施された大きな鏡が掲げられている。1945年の8月、第二次世界大戦が終わり、日本は海外からの撤兵を開始した。兵士や民衆が門司に押し寄せ、駅に着いた人々の群れは何時間も、電車で詰め込まれるのを待った。その中には妊娠中の旅行者であるうた子が居て、彼女はホームで陣痛を起こした。破水したときにはすでに夜が明けており、地元の医師はすべて診療所を閉めていたため、駅員の一人が歌子の3歳の子供を背負いながら、彼女を自分の家まで案内した。隣人の助けもあって、彼は無事に赤児の出産を補助することができた。歌子は新生児に「門司」の漢字を使用した「左門司」という名前を付けられた。

池田左門司が大人になった1971年、「誇りの鏡」を門司港駅に寄贈した。これは、駅員達に対する「自分自身の姿を見て、駅での仕事に誇りを感じてほしい」という池田左門司の願いを込めて寄贈したものである。

帰り水

ホームの傍の古いお手洗いの前にある噴水は、門司港駅を通った旅行者を思い出させるもうひとつの遺構だ。「帰り水」と言われている。帰還兵や植民地から引き揚げてきた日本人は、この噴水のある場所で、汽船の煤や旅の埃を洗い流し、母国に帰って初めて水を飲むことができたのである。